

## 手渡される日記の物語

Anne Brontë の *The Tenant of Wildfell Hall* における語り

舟 橋 美 香

1828年に出版された Anne Brontë の最後の小説、*The Tenant of Wildfell Hall*<sup>(1)</sup>は、非常に凝った構成の作品である。その構造は、語りの技法と密接に結びつき、女性の秘められた生の実像を明らかにする。アン・ブロンテの語りは、女性と女性の書いたものが置かれていた状況の自制的な存在性を、そのまま読者に公開し、同時に隠蔽するのである。

George Moore の「ヒロインは自分の日記を渡したりしてはいけない……物語をみずから語らなくては」(qtd. in Gérin, 14) という見解や、彼に賛同し、「この作品の欠陥は構造にある」(13)とした Gérin の考え、Terry Eagleton の「この構造的仕掛けの効果は、残念ながら、かんばしくない」(304)とする批判は、的外れと言わざるをえない。このことは、近年の『ワイルドフェル・ホールの住人』についての批評の多くが、語りの技法と構造を分析しているという事実<sup>(2)</sup>によっても明らかである。

『ワイルドフェル・ホールの住人』は、全体が、一人の男性が友人に宛てた長い手紙の体裁をとっている。そして、彼の手紙の中には、まるで入れ小のように、一人の女性の七年にわたる日記がしまい込まれている。そして、彼と彼女の語りには、いくつかの書簡が挿入されているし、内箱の語り手である女性が画家であることから、女性の描く絵も、小道具として、また、女性の表現形態の一つとして登場する。まさに、女性の感情表出と、隠蔽あるいは沈黙の問題を考えるには、絶好の書であると思われる。そこで、本論では、アン・ブロンテがこの小説でとった構造と語りの方を、小説の中核をなす女性の日記が抱える問題を中心にすえて、吟味してみた

い。

日記という表現形態は、自分以外の読者を想定しないという前提を信じるかぎり、誰に聞かれる心配もなく自己の思いを表白する場を書き手に保証する。女性にとっては、それは、いわば、もっともささやかな「自分だけの部屋」であり、このプライベートな空間の中では、女性は、書くことを阻んできたさまざまな障壁を感じることなく、自分の好きなことを、日々の生活を、自己の考えや感情を綴ることが可能となる。しかし、日記は自分だけのものとして存在する以上、他者にとっては、読むことのかなわぬ未知の領域であり、存在しないものとしてしか認識されない。つまり、日記の書き手にとっての重要性と存在は、他者にとっては非存在になり、一方、もしそれが他者の目に曝されると、従来持っていた日記のプライバシー・自律性は、失われてしまう。

語りの形式としての日記を、自分のフィクションに取り入れることを作家が決意したとき、その作家は、日記の抱えるアンビヴァレントな存在性と向き合わなければならない。つまり、作家は、自分だけの秘められた思いの告白である日記を、その隠された非存在から掬いあげ、どのように読者に公開するかという問題に直面する、ということである。たとえ小説が一つの虚構の世界にすぎないとはいえ、もし日記の公開の方法を一步あやまれば、その日記の書き手にとっては他者には読まれるべきではなかったはずの秘匿された記録の信憑性が疑われてしまう。そして、そのことは、その存在を信じてもらえたかもしれない、作家が構築してきた世界そのものの信憑性に疑問を投げかけ、それゆえに、作品全体に亀裂を生じさせ、悪くすれば、構築物の全壊に発展することすらありえるのである。

フィクションのなかに置かれた日記の公開がこのような危険を伴うために、作家は、現実の日記が他者に読まれる場合にもっともありえそうな方法を選択することが多い。それは、日記の書き手の死後に読まれるという形式である。日記が隠されていた場合は、その発見の物語が伴うことにな

ろうし、日記が誰かに読まれるために遺されることもあるだろう<sup>(3)</sup>。もちろん、書き手の生前でも、盗み見られることや、強奪されることによって、その日記が他人の目に曝される危険性は十分考えられる。実際、アン・ブロンテは、女性の日記が、夫によって奪い読まれる場面を描いている。しかし、『ワイルドフェル・ホールの住人』の中心を占める日記は、書き手の女性から、一人の男性に手渡され、読まれたあとに、ふたたび彼女のもとに返却される。このようにして手渡された日記は、まずその男性に読まれ、そして、彼が友人に宛てた手紙の中で読者に公開されるのである。たしかに、日記の読まれ方としては、かなり風変わりであると言ってよいかもしれない。

しかし、このような通常では考えられない方法で、女性の日記を男性に読ませ、その日記を読者に公開するという物語の構造を考案した『ワイルドフェル・ホールの住人』の作者は、およそ現実離れとは対極の資質の作家であった。Angeline Goreau が言うように、「自分の語りが真実のものであると強調」するアン・ブロンテにとっては、「読者に信じてもらえるかは、彼女の執筆の目的をささえるかなめであった」(38)。ではなぜ、そのような彼女が、あえてこのような語りの技法と物語の構造を選んだのだろうか。

この疑問に答える前に、シャーロット・ブロンテが、『ワイルドフェル・ホールの住人』の再版を Smith, Elder に思い留めさせるために、1850年9月に書いた有名な手紙の一節を引用したい。「あの作品におけるテーマの選択がまちがいなのです——あのテーマは、それを書いた作家の資質とはあまりにも調和するところがなさすぎたのです——おだやかで控え目な経験不足の作家の資質とは。彼女は、あの作品を書いたのです、つらい罪の償いと酷しい義務を成し遂げようという、異常な、良心に責められるような、なかば苦行者のような思いで」(qtd. in Rosengarten, xi)。『ワイルドフェル・ホールの住人』の執筆の最終段階は、たしかに、Branwell Brontë が飲酒と麻薬によって徐々に死に向かっていた時期と重なっていた。しかし、

シャーロット・ブロンテが考えたように、この作品の成立と人物造形を伝記的な要素のみと関連づけようとする従来の考え<sup>(4)</sup>は、作家アン・ブロンテに対する評価の高まりと共に薄れつつある。もし、シャーロットの観察が正しかったとするならば、アン・ブロンテを執筆に駆り立てていたのは、兄に対する自責の念という個人的な思いではなく、むしろ、自分が選択したテーマをなんとしても世の人に伝えようとする、作家としての責任感ではなかったろうか。

彼女は確信していたはずである。自分がいま書いている小説が語ることが、当時の読者にとっては、驚くべきものであることを<sup>(5)</sup>。『ワイルドフェル・ホールの住人』の中心的な物語が、前作 *Agnes Grey* で描いた女性家庭教師の物語よりも、さらに人間の醜い部分を暴き出す悲惨なものとなることを。放蕩と飲酒で心身共に崩壊していく男を夫としてしまった女性、Helen Huntingdon の物語は、当時の読者に真実として受けとめてもらえない危険性を伴うことを。それでも、彼女は書かないではいられなかった。以下の、『ワイルドフェル・ホールの住人』の第2版に付けた序には、アン・ブロンテの覚悟と決意が読み取れる。

... I wished to tell the truth, for truth always conveys its own moral to those who are able to receive it. But as the priceless treasure too frequently hides at the bottom of a well, it needs some courage to dive for it, especially as he that does so will be likely to incur more scorn and obloquy for the mud and water into which he has ventured to plunge, than thanks for the jewel he procures; as, in like manner, she who undertakes the cleansing of a careless bachelor's apartment will be liable to more abuse for the dust she raises, than commendation for the clearance she effects. Let it not be imagined, however, that I consider myself competent to reform the errors and abuses of society, but only that I would fain contribute my humble quota towards so good an aim, and if I can gain the public ear at all, I would rather whisper a few wholesome

truths therein than much soft nonsense. (xxxvii)

彼女は、「井戸の底に隠れていることが多い」本当に価値のある真実を明らかにすることで、作家である自分が「浴びる水と泥」や「埃」、すなわち、読者からの「嘲弄や誹謗」、「悪口」を覚悟していた。そして、彼女が「真実」を語るためにどんなに「勇気」が必要であったかも。しかし、この文は、彼女の決意表明であるばかりではなく、作家ブロンテが、この小説で取った構造と物語の技法の意味をみずから解説したものとしても読めるように、思われるのだ。N. M. Jacobs の『嵐が丘』と『ワイルドフェル・ホールの住人』の語りを論じた批評は、じつに多くの示唆に富むものであるが、Jacobs も、上記の文を紹介しながら、エミリーとアン・ブロンテは、この二つの小説の中で、「自分たちの秘密を明らかにする過程を映し出し」、その小説の構造が、彼女たちの「勇敢な探究」を反映しているのだと指摘している (217)。

どうしたら自分の語ろうとする物語に本当らしさを付与できるか悩んだアン・ブロンテは、もっとも語りたかった物語を「貴重なたからもの」であると認識してもらえるように、「井戸の底に」、すなわち、小説の語りの表面ではなく、奥底に潜ませたのである。『ワイルドフェル・ホールの住人』の、中心にヘレンの日記をしまい込んだ入れ小のような構造は、まず、彼女の秘密を入れる装置として機能する。いわば、小説全体が、真実という宝石を中に含んだ「からくり箱」となる。そして、そのなかに隠匿されていたともいえる日記は、そこに書かれたものが他者の目に曝されることをいかに恐れていたかを、その秘匿されていたという事実・存在性によって証明する。いや、むしろこう言ったほうがよいかもしれない。ヘレンの日記は、小説のなかばまで「存在しないもの」として存在していたという、逆説的な存在性によって、女性の日記の特質とも言うべき姿を具現しているのだと。アン・ブロンテが『ワイルドフェル・ホールの住人』で構築し

た入れ小構造は、物語の冒頭からその途中まで、ヘレンの日記の存在を、そのフィクションの世界の住人たちからも、読者からも、隠蔽することによって、彼女の「真実」を秘めた日記に、現実の日記のもつ「非存在性」という本当らしさを纏わせるための仕掛けなのである。

さて、問題はこれからである。つまり、彼女の存在の真実を明らかにするためには、ヘレンの日記は読まれなければならない。ただし、おいそれと公開するわけにはいかないのだ。なぜなら、それが覆いを剥がされ、他者の目に触れることを嫌い、他者の耳に聞こえることを本来は望んではないのだから。つまり、『ワイルドフェル・ホールの住人』は、登場人物であるヘレンの真実と彼女の日記が明かされる経過の物語であり、一方、覆いを剥がされることを拒もうとする彼女／日記の抵抗の物語でもある。では、これから、このような両方向を目指す物語を、その語りの方から考察してみたい。

『ワイルドフェル・ホールの住人』の語り手として、作者アン・ブロンテが選んだのが、Gilbert Markham である。この小説の入れ小構造の外枠の語り手であるギルバート・マーカムは、友人 Jack Halford に宛てた手紙のなかで、「自分の色あせた古い日記」と「かび臭い古い手紙やら書きもの」を頼りに、「自分の人生でもっとも重要なことに関わる出来事の始まりから終わりまでをありのままに」(6)話そうとする。当時の自分が経験したことをそのままに再現しようとする彼は、当時24歳のなにも知らなかった自分の視点から、物語をつくりあげる。それは、近隣の壊れかけていたワイルドフェル・ホールを一人で借りることとなった女性、自称 Mrs. Graham の登場によって始まり、彼女に惹かれた彼が、紆余曲折の末、彼女と結婚するまでの物語であるが、その前半は、彼が、謎めいた女性、ヘレン・グレアムと親交を深める経過を詳らかにし、ついに彼女の日記を手渡されるまでの、いわば、ヘレンの本当の姿に接近して行く彼の道程とも言える。

W. A. Craik の言うように、ギルバート・マーカムは、「謎を作り出す手

段」(54)であるのだが、同時に、彼は、Linden-car に土地を持つジェントルマン・ファーマーであり、ヘレンに恋をして、しまいには、彼女の第二の人生の伴侶となる物語の主人公でもある。彼は、作者によって、いわば二重の役割を任されていることになる。ひじょうに厄介な人物であると言わねばならない。小説の構造と語りの問題を抜きにしては、彼を論じることとはできないし、一方、そのような役割を担っていることも、登場人物としての彼の資質の一部であることになるからだ。

若きギルバート・マーカムくんの評判は、『ワイルドフェル・ホールの住人』についての批評においては、あまりかんばしくないと言ってよいだろう。Russel Poole 曰く、「もちろん、どの批評家も、青年時代の後半にあるギルバートを、この本が理想とする未来の男性像とは、考えたりはしないだろう」(862)。Gérin の “a decent man” (16) という、奥歯にものが挟まったような言い方には、「まあちゃんとはしてます、この男は」というようなニュアンスが感じられるし、「紙きれのように薄っぺら」と Arthur Huntingdon に手厳しい評価を下す Bettina L. Knapp の、彼より「暴力と偏見が愛とやさしさと混ぜ合わされたマーカムの方が、複雑になっている」(98) とする見解も、揚げたり下げたりの評価と考えられる。

このように言われるのは、マーカムくんは、ワイルドフェル・ホールの所有者でもある独身の青年、Mr. Frederick Lawrence と愛するヘレンが「できている」という噂を耳に入れないう奮闘したものの、その二人が夜に腕を組んで歩きながら話しているところを物陰から見聞きして、噂は本当だったと怒り心頭、ロレンスくんが自分とヘレンとの間を邪魔していると思い込み、ついには、彼に殴りかかって落馬させ、大怪我をさせてしまうという、血気盛んな恋する青年、お馬鹿なやつでもあるからである。Elizabeth Signorotti は、彼がロレンスに振るった暴力行為を、アーサーが犬に与えた虐待行為と平行なものを見做している (22)。

しかし、ギルバート・マーカムに対する、批評家からの激しい非難は、

この乱暴な振舞いよりも、せつかく渡されたヘレンの日記を読んだ後に示す彼の利己的とも鈍感とも映る反応と、彼女の日記を友人の手紙の中で明かしたことに向けられている。しかし、そもそも、なぜヘレンはギルバートに日記を渡したのか。この疑問に答えなければならないだろう。

とは言っても、これが一筋縄にはいかない。なぜヘレンは日記を渡したのか、というのが、第一の疑問であるが、これに、なぜギルバートに、という別の問題がからんでいる。とりあえず、ヘレンが日記を渡さなくてはならなくなった状況を、整理してみよう。

Jan B. Gordon が指摘しているように、「この小説の最初の十章は、ゴシップが効力を獲得しようとするもくろみ以外の何ものでもない」(722)。リンデン・カーのような平和な田舎町では、新参者というだけで話題の種になる。それに加えて、ヘレンは、地域住民の「普通」の概念からは、どうあっても「変わっている」。そもそも、彼女がいつから館に住み始めたのかわからない。その上、若い女性が一人で借地人になることが普通ではない。もうこれだけで、好奇心を刺激するのに十分であろう。そして、謎を薄れさせようと、彼女が社交の場に出かけると、五歳くらいの息子 Arthur をいっときも自分のそばから離さない、溺愛とも過保護とも映る態度や、一滴のワインも息子に飲ませまいとする姿勢等が、ますます彼女を不思議な存在として印象づけてしまう。

しかし、ヘレンがうわさ話の標的になる最大の理由は、彼女が近隣の住民との交際を避けようとする姿勢にある。この社会から身を隠そうとする態度の背後に、なにか反社会的なものが隠されているのではないかと疑われてしまう。そして、周辺住民が嗅ぎつけたものは、ある意味では当たっているのである。彼女が、夫、アーサー・ハンティンドンのもとを出奔したのは、彼と仲間たちが息子に及ぼす悪影響がこれ以上容認できないまでになったからであった——「私は耐えられる。しかし、私の息子のためには、もう限界だ。世の人の意見や私の友人たちの気持ちも、ともに考慮に



入れてはられない」(355-56)。ヘレンはもちろん、自分のとる道が法に反していることを認識している<sup>(6)</sup>。しかし、ヘレンは、法を遵守することを説くであろう「世の人の意見」に従うよりも、息子にとって正しいと信ずる出奔を計画し、実行した。したがって、ワイルドフェル・ホールでの生活で彼女が求めたものは、隣人との交際ではなく、かれらが「自分をほうっておいてくれさえすれば」(104) それだけ嬉しいというものであった。社会に背を向けようとする彼女の姿勢、いわば、自分の身の上に隠蔽のヴェールを纏ったことが、その身を護るどころか、逆に、覆いを剥ぎとろうとする攻撃に身を曝すことになる。ロレンスがじつの弟であることを隠しているために、ふたりの仲を誤解され、モラルを疑われた彼女は、「その名前がきちんとした女性の前で口にするのがふさわしくない」(110) 存在とみなされてしまう。彼女がようやく手に入れた「希望と自由で心踊る気持ち」(397) で始まったワイルドフェル・ホールでの隠遁暮らしは、徐々にうわさ話に包囲され、説教をしにやってくる牧師に責められて、「ここでは気が休まらない」(104) というところまで、彼女を追い詰めていく。

Gordonの指摘のように、「うわさ話を恐れるということは、誰かほかの者のフィクションのなかの人物、『他者』になることを恐れることである」(723)。とするならば、ヘレンがギルバートに日記を渡したのは、Gordonの言葉を借りて言えば、「その発信源を辿ることも決定することもできない」、「匿名の一般国民の『誰か』」(722)の捏造による語りではなく、自分が書いた自分自身のテキストによって、彼女自身の真実を伝えようとした行為であると考えられる。いわば、ヘレンの日記の公開は、社会という「集団による陰謀」(Gordon, 723)の生み出した虚偽に対しての抵抗であり、彼女一人の戦いの宣戦布告とも呼べる身振りである。

また、彼女がギルバートに日記を手渡すときに示す沈黙と、ゴシップという話(speech)に対して、日記という文字(letter)をもって、彼に真実を語ろうとする姿勢は、この作品で世間に挑んだときの作家アン・ブロン

テの姿勢と重なり合う。彼女は、この作品の初版には序をつけなかった。読者に、ただ作品をゆだねたのである。しかし、彼女は第二版で作品の意図を説明しなくてはならなくなった。その結びの言葉には、当時の読者に対する非難が込められている。「私が当惑してしまうのは、どうして男性には、女性にとって本当に不名誉なことをなんでも書くことができるのか、あるいは、なぜ、男性が書いたなら妥当でふさわしいことを、女性が書くと咎められなければいけないのか、ということを感じるからなのです」(xxxix)。アン・ブロンテは、女性のライティングの価値を十全に理解することをせず、女性についてのフィクション／うわさ話を捏造し続ける男性作家に対して黙ってはいられなかった。アン・ブロンテの序は、自分の書くものには、女性の真実が語られているという自信の表明でもある。

ヘレンに話を戻そう。ヘレンが、それまで自分だけのものであった日記を、ギルバートに手渡すという行為は、プライバシーを放棄することである。それは、自制的なただ一つのテキストが、「継続的に版を重ね／脚色されながら模写される」過程の始まりであり、以降、「テキストは、それに形を与える他のディスクールのなかに組み込まれて、『譲り渡される』」(Gordon, 727-28) ことになる。ギルバートは、彼女の日記から、「書き手にとって一時的に関心があっただけの数カ所」と、「話の筋の邪魔になる部分を省いただけで」(126)、それを彼の友人のハルフォード宛の手紙に挿入し、そして、それが小説の読者に公開される。ギルバート版日記の編纂とも呼べるこの行為は、彼が日記を手渡されてから二十年後のことである。しかし、ヘレンの書いたものの彼による編纂は、日記が読まれたすぐ後に開始されている。ヘレンの日記を収めた部分の後につづく第47章～第49章には、弟のロレンス宛に書かれたヘレンの手紙／文字が、ギルバートによって読まれ、彼の日記／文字の中に取り込まれる過程が描かれている。彼は、ヘレンの「貴重な手紙を貪るように読み、そこに書かれていたことを自分の頭に焼き付けて、家に帰ってから、そのもっとも重要な部分を自分

の日記に入れた」(447)。こうして、彼のペンによって写し／移し変えられた彼女の手紙を収めた「色あせた私の古い日記」(6)は、ヘレンの物語を二十年後に再構成する際のギルバートの典拠となるのである。

ギルバート・マーカムに対してかなり厳しい評価を下しているとも言える Signorotti は、彼の行為を、彼女が彼に日記を託した信頼への冒瀆であり、それは、彼の「彼女の物語を支配し操作しようとする略奪的欲望」(22)の表れであると考察している。Signorotti によれば、彼にとっての現在の関心事は、ヘレンとの間の信頼関係よりも、友人ハルフォードとの間の「男同士の友情」を持続させることであり、「ヘレンの歴史を不当に濫用し編纂するマーカムの行為は、彼女を取り込み支配しようとする試みを表す。知識を持つことが、権力を持つことと同義である世界においては、ハルフォードに秘密を暴いて見せるマーカムの書簡は、ヴィクトリア朝の男性が女性を支配する権力を維持してきた方法までも、表すのである」(21)。Signorotti は、もちろん、アン・ブロンテがとった構造に疑問ははさまない。なぜなら、「日記が引き渡され、のちにそれがマーカムによって不当に暴露されるということが、ヘレンとマーカムの関係を理解させるためには、おそらくもっとも有効な語りの仕掛けである」(22)と、考えるからである。

この小説に描かれた、女性のライティングが受ける編纂と変質は、『ワイルドフェル・ホールの住人』というテキストが被ることになる不遇の前触れでもあった<sup>(7)</sup>。そして、ヘレンが真実を知ってもらうために、彼女のプライベートを他者に委ねなければならなかったように、『ワイルドフェル・ホールの住人』の発表によって、作者も、Acton Bell という名前の下に隠された自分の姿を、世間に公表しなければならなくなった<sup>(8)</sup>。まさに皮肉なことではある。しかし、アン・ブロンテのテキストと、ヘレンの書いたものが辿る運命が同じであるということは、その人物を生み出した作家が、当時の女性のライティングが置かれていた状況をいかに忠実に表現していたかを証明しているようにも、思われるのだ。

やや脱線したようである。本筋に戻ろう。ともあれ、ギルバートがヘレンとの約束を破ったために、いや、作者アン・ブロンテによって、ヘレンの日記は、小説の秘められた「井戸の底」から掬いあげられ、その存在を明らかにする。

ヘレンの日記は、多くの批評家が指摘しているように、七年にわたる生活のあいだに、ヘレンが本来備えていた精神の躍動が、いかに失われていったか、いかに彼女が自分の感情を制御し、沈黙と隠蔽を学ばざるを得なかったかの記録である<sup>(9)</sup>。しかし、その一方で、最初の頃の彼女の日記は、夫や他者から隠蔽した感情が、いかに激しいものであったかを、細かい記述と会話の再現によって、物語ってもいる。彼女の日記に溢れるように満ちているのは、会話する声である。それは、一人一人の話す声の調子までがわかるほどに、克明に再現されている<sup>(10)</sup>。ひとの声を記録しよう、会話を再現しようとするヘレンの日記の特徴は、沈黙させなければならないみずからの感情に対する埋め合せのようにも思われる。そして、夫の長い留守のあいだの彼女の孤独の深さの反映でもあるだろう。

自由な感情を他者に対して隠蔽しようとするヘレンの姿勢は、アーサーとの出逢いと結婚生活のあいだで習得されたものである。ヘレンは、彼女の感情表白を残酷に利用し、笑い飛ばすアーサーに対して、徐々に感情を制御せざるをえない。そうは言っても、彼女の親友の Millicent のように、ヘレンが夫に対して、ただ沈黙していたのではけっしてないことは、彼女の日記に綴られた会話が証明している。しかし、彼女は、自分の内にある激しい感情を、アーサーや彼の仲間たちの前で示すことはできない。彼女は、日記について、こう書いている——「私の心から溢れ出るものを耳に入れることができる信頼できる友人の代わりにしてくれるだろう。私の悩みに同情はしてくれないが、笑ったりはしない、それに、これを私が閉じておけば、喋り出したりはしない。だから、たぶん、私のためには一番の友人なのだ」(151)。もちろん、ヘレンには、彼女を思いやるミリセントや、

彼女の結婚に反対した賢い叔母がいないわけではない。しかし、夫の選択をあやまったという「自分の失敗を認めたくない彼女のプライドと、友人たちに心配をかけさせたくない」思い (Jacobs, 212) から、彼女は、夫との不幸な結婚生活について、手紙に書くことができない。もちろん、ミリセントとヘレンは、おたがいの手紙のなかに、語られている以上の苦悩があることを、認めあっているのだが<sup>(11)</sup>。いずれにしろ、夫にも、友人たちにも語れぬ思いの受け皿は、ただ彼女の日記だけ、となるのである。

しかし、長い間にわたる感情の抑制は、ヘレンから人間らしさを徐々に奪い、彼女を、「ついにはなにものも溶かすことはできないほどまでに石化してしまう」(325)。第36章～第38章は、それぞれ、結婚記念日にあたる12月20日に書かれた記載で、たった三章で1824年から1826年までを語ってしまう。そこにあるのは、単なる一年間に起こったことの概観記録にすぎない。もちろん、これは、同じような繰返しを避け、時間の経過を早めるために作家がとった方策ではあろう。しかし、このあたりのヘレンの日記のそっけなさは、そのまま、彼女の感情がもはや抑制する必要もなくなったことを意味するのではないだろうか。つまり、彼女の荒涼たる精神世界の反映であると言ってもよいだろう。彼女の日記に綴られている事件や内容ばかりではなく、彼女が日記にどのように書いたのか、あるいは、日記をどのくらい綴ったのか、そのこと自体が、ヘレンの変化を物語っているのである。

さて、アン・ブロンテは、『ワイルドフェル・ホールの住人』全体が、まるでギルバートの長い手紙であるかのように見えるように、細心の注意を払って、書簡の形式を遵守した構成をこの小説に与えている。第1章の前には、友人であり彼の妹 Rose の夫でもあるジャック・ハルフォードに宛てた、ギルバートの手紙の冒頭が置かれ、つづく第1章は、1827年の秋に始まる出来事を回想する形で始まるが、ギルバート・マーカムの署名をもっていったん閉じられる。第2章は、ハルフォードが先の手紙の続きを所望

してくれているので、物語をつづけよう、という前置きで始まる。ここから始まるギルバートの手紙は、小説の最終章の最後に置かれた、彼の署名と「Staningsley, 1847年6月10日」をもって完結する。これが、小説においても最後の言葉となる。そして、外枠をなす彼の語る1827年秋に始まる物語／手紙のなかに、1821年6月1日から1827年11月3日までの、ヘレン・ハンティンドンの日記が挿入される。ヘレンの日記は、第16章～第44章という、まさに、小説の中心に置かれている。

小説の構造におけるヘレンの日記／語りの中心的位置は、アン・ブロンテが、先行する文学ジャンルの技法をいかに模倣し、それを独自のものとしたかの証左としても考えられる。Jacobsは、『嵐が丘』と『ワイルドフェル・ホールに住人』に共通する「悪がその中心に隠された」(207)構造に、ゴシック・ノヴェルとの類縁性を指摘し、アン・ブロンテの語りがそれとどのように類似し、また、異なっているかを明らかにしている。Jacobsによれば、ゴシック・ノヴェルの外枠の語りは、まさに、「絵をおさめた額縁」であって、「鑑賞者が注意を向けるべき画家の技巧のあらわれ」である絵そのものと、いわば、その絵の外の壁、「注意を向けなくてもよい世俗の現実」を分かつ「境界線」にすぎない。「しかし、ブロンテの外枠をなす語り(framing narratives)は、内側の絵と競い合う芸術作品のようなもの、あるいは、美術館の陳列室までの部屋のようなもの」で、「私たちは、その『外枠をなす』語りを最初に経験しなければ、『枠の内に入れられた』物語の埋められ隠された現実を経験することはできないのだ」(206-7)。

Jacobsが言うように、ヘレンの日記には、ギルバートの語りを読まなければ近づけない。しかし、ヘレンの物語は、いわば、現在完了時制であって、現在と切り離された過去のものではけっしてない。アン・ブロンテが描こうとしたのは、ただ、放蕩と酒によって墮落する男の物語ではなかったし、それに耐える女性の物語にとどまらない。ヘレンの抱える最悪の問題は、「そのような扱いを受けたことによって被った精神的ダメージであ

る」(Senf, 454)。つまり、「外枠をなす」ギルバートの語りの中にも、「埋められ隠された」ヘレンの現実、アン・ブロンテの言う「真実」を見つけなければならない、ということである。

アン・ブロンテが、ゴシック・ノヴェルから借用したのは、構造ばかりではなかったようである。Jacobsによれば、ゴシック・ノヴェルにおける「内部の閉じられた世界は、社会的な世界の内にある隠された自己、プシュケの暗い部分に接近していく。外枠をなす語り手、あるいは、編纂者の役割を果たす人物は、ふつう読者の世界に属しており、彼が遭遇するゴシック的な悪にショックを受ける因習に因われた現実的なタイプの人物である」(206)。ゴシック・ノヴェルにおける編纂者についての性格づけは、まさに、『ワイルドフェル・ホールの住人』の外枠の語り手、ギルバート・マーカムにもぴったり当てはまる。また、物語の構造は、ギルバートを、社会構造における「権力をもつ者」として、ヘレンの物語に「覆いを被せる語り手」とし、彼の手紙の中で「覆いを被せられる語り手」となるヘレンは、その取り込まれた構造の中の位置によって、みずからが、「権力を持たぬ者」である存在性を明らかにする(Jacobs, 207)。しかし、アン・ブロンテは、ゴシック・ノヴェルの構造を模倣しながら、そこからの逸脱をはかる。ヘレンは、内枠のなかから出て、その語り手となる男性と出会うのである。これは、ギルバートによって取り込まれることを逃れるヘレンの存在性の証明であると思われる。

さて、そろそろ、なぜヘレンは日記をギルバートに手渡したのか。そして、なぜヘレンは彼を第二の人生の伴侶として選んだのか。また、彼はその日記になにを読み取ったのか、という問題に取り組むことにしよう。そのためには、小説の最初に戻って、若きギルバート・マーカムくんが登場してもらわなくてはならない。

小説前半のギルバートを、「ヘレン・ハンティンドンを征服すること、追い詰めること(hunting down)にしか関心がない」(21)と批判する Signor-

otti は、彼とアーサー・ハンティンドンとの近似性・類似性を強調している。たしかに、ヘレンの日記を編纂するギルバートには、アーサーと同様に、彼女を支配しようとする欲望が見られる。しかし、両者には、対照的な資質もある。ふたりのファミリー・ネームに意味を読みとるならば、Huntingdon が、獲物を駆り出す hunter であるのに対して、Markham は、獲物の位置を突き止める marker ということになるだろうか。つまり、ギルバートの方が、追われる者にとっては危険度が落ちる存在ということになる。

とはいえ、ギルバートは、ヘレンの秘密を嗅ぎ出すことにおいて、なかなか有能である。そもそも、彼女のファースト・ネームを発見したのは、彼のお手柄である。本の貸し借りをするところまで、彼女と親密さを増した彼は、彼女の本の中にヘレンの名前を発見し、以降ふたりはファースト・ネームで呼び合うことになる<sup>(12)</sup>。これは、じつに、第11章のことである。秘密を保持しようとするヘレンと、それを嗅ぎだそうとするギルバートとの駆引きを通じて、作者は、すこしずつヘレンについての情報を読者に手渡していく。しかし、この過程がきわめて緩慢なのは、ギルバートの猟犬としての能力が、ヘレンの夫のアーサーよりも鋭くないことに加えて、彼の追跡行動をヘレンが抑制するからである。小説前半は、Gordon の分析で示したように、ヘレンがゴシップに包囲されていく経過を描いている。同時に、それは、ギルバートがヘレンの謎を探り出す過程であり、一方、彼がヘレンによって、いわば、調教される諸段階を示してもいるのである。

ギルバートは、二つの任務を遂行しなければならない。つまり、彼は、ヘレンの秘密を嗅ぎ出し、それを読者にすこしずつ明らかにすると同時に、ヘレンの愛を得るため、その追跡行動がヘレンに危険なものに見做されてはならないのである。一方、ヘレンの側から見れば、自分に近づく彼の真意を確かめ、彼の資質を見抜き、彼を自分のそばに置いても安全な存在になりうるかを見極めることが必要となる。両者のさぐり合いは、第5章で、本格的に開始されているので、この場面を引用を交えて考察してみよう。



妹ローズとともに、ヘレンのアトリエに案内された彼は、彼女が製作中の風景画を見る機会を得る。明らかにワイルドフェル・ホールを描いていると思われるのに、その絵の隅に“Fernley Manor, Cumberland”と書き込まれているのを、彼は見逃さない。彼の指摘を受けたヘレンは、「一瞬の赤面と躊躇のあとで、しょうがないというような率直さで」、自分には、今の住まいを秘しておきたい者がいるので、偽名のイニシャルを署名に使うばかりでなく、「もし私の後を追おうとしているのなら、まちがった臭跡を辿ってくれるように」しているのだと打ち明ける(43)。彼女はこのように追われている身の上であることをギルバートに打ち明けることによって、自分の隠蔽行為を彼と分かち合うのだと解釈することもできるだろう。また、彼女が身分を隠さなければならない秘密をもっていることを引き出したことは、彼のお手柄と言えよう。

さて、彼は、ヘレンが示した一瞬の間によって、自分が「出すぎた態度をとったこと (impertinence)」(43)に気づくのだが、彼女が答を与えてくれたことで、いい気になってしまう。彼女がその場を離れたすきに、彼はアトリエを嗅ぎ回り、部屋の隅に表を壁側に向けて隠されていたアーサーの肖像画を見つけ出すのに成功する。その人物が誰なのか尋ねる彼は、ヘレンに、「あなたの行為はほんとうに出すぎたもの (impertinence) ですわ。ですから、なにもお尋ねにならないでください。あなたの好奇心にはお応えできかねます」(45)と、つっぱねられることになる。

この一連の場面は、ギルバートが、どこまで彼女が隠そうとするものに踏み込んでいいか、すなわち、impertinenceにならない境界線を示される第一歩なのである。「彼が彼女といっしょにいたいと望むのなら、自分の意見を調整する以外にマーカムには選択の余地はないのである」(Signorotti, 24)。つまり、ヘレンは、彼にここまでは入ってよろしいという線を教え、その言いつけに彼が従うかを試しているとも言えよう。作者のアン・ブロンテは、ギルバートに、彼女を獲得したいという欲望を与えている。同種

の欲望は、アーサーや、彼との結婚生活が破綻したあとヘレンを追い回す Walter Hargrave にも見られたものである。しかし、作者は、ギルバートから獐猛な危険性を減少させてもいる。彼は犬であってもよいが、猟犬になってはならない。そのために、作者とヘレンは、ギルバートを、猟犬から家庭の飼犬としてしつけ直さなくてはならない。

一方、彼がヘレンの愛を得るためには、すなわち、家庭の中に入れてもらうためには、彼女に対する忠誠心を証明しなければならない。そこで彼は、周囲に流れるうわさ話に耳を貸そうとせず、彼女に愛を告白するのである。ヘレンに、「あなたのまわりの人たちがみんな疑念の目を向け、軽蔑もしていると、あなたもご存じの者のご自分を結びつけるほど、ヒーロー精神がおありなの？」と尋ねられた彼は、「喜んで！」と答える (100)。彼の愛情告白を聞いたヘレンは、自分の秘密を翌日に話すことを約束する。「そうすれば、私たちがもうおつきあいをつづけられないこともおわかりになるでしょう」(102)と警告もするのだが。ご褒美をもらえるとはいやぐギルバートは、つい「出すぎた行動」に出てしまう。彼女に自分を愛しているか尋ねるのである。そして、「それにはお答えできません！」というヘレンの言葉を、「では、僕はそれをイエスだと考えましょう」と解釈する。彼女のもとを退出する彼に、ヘレンは、「どうか私をほうっておいて！」と呼びかけている (102)。

しかし、である。彼の犬っぽい習性は、ヘレンをほうっておくことができない。愛しいヘレンの姿を「ただもう一度見たいと」(124)、こそこそ館に戻り、物陰からロレンスとヘレンが寄り添う姿を目撃し、ふたりの会話の断片を聞いてしまう。言いつけを守らなかった彼の自業自得であるのだが、「もし僕が悪かったんだとすれば、ただ愛ゆえにそうしてしまっただけで、その罰はあまりにひどいものだった」(124)。これは、のちに彼がヘレンに訴える場面のせりふだが、ここにも、犬くさいものが感じられる。悪さをしてしまったと叱責される犬が、ただご主人を思っただけの行動でやった

ことなのに痛い目にあうなんてひどいです，とキュンキュン言っているよ  
うなのだ。彼がロレンスに殴りかかる暴拳に出たのも，いわば，ご主人が  
よその犬を頼りにしていることからくる嫉妬のなせるわざで，通りでの犬  
の小競り合いに似た様相を示している。(結果は，ずっと甚大であるのだ  
が。)また，彼が，ヘレンとの翌日の約束を無視するのも，よその犬を可愛  
がったことに拗ねている犬の身振りに，どこか似ている。このように考え  
ると，彼はもはや獵犬とは言えないだろう。家に入れてもらうことを願っ  
て吠えている哀しくも愛らしい犬なのだ。

この犬っぽさがギルバートの一つの特徴であるとすれば，彼のもう一つ  
の性癖は，そそっかしさであろう。彼は，うわさ話を信じないことにおい  
て，ヒーロー気質を持ちあわせている。しかし，哀しいかな，彼は，表面  
に惑わされ，その下に隠された真実を見抜くことができない。あるいは，  
ものの表面を判断の基準として，本当らしいことにすぐ飛びついてしまう，  
単純で慎重さに欠ける人物なのである。

もう一つの特徴は，滑稽さである。彼が自分の受けた傷の痛みを語る部  
分は，悲愴と言うよりも，みょうに微笑ましい。大仰な言い回しが，彼が  
真面目になればなるほど，空回りしているという感じであろうか。その上，  
彼の推測の土台があやまっていることを知って読み直すと，「でも僕はなん  
て馬鹿だったんだ！」(121)という彼の自問自答が，その時点の彼にもそ  
のまま当てはまってしまっただけに，どうにも可笑しい。とはいえ，ショッ  
クで動転し，時間も忘れて物陰でおいおい泣いてしまうあたり，なかなか  
可愛いところもあり，私が彼を「愛すべきお馬鹿」と呼ぶのは，このゆえ  
である。

Poole は，「哀しみにくれる乙女の後をまごまご追いかけるギルバート  
は，彼のまわりの人たちを面白がらせ，嘲笑を誘う。彼が，夢想に耽るド  
ン・キホーテを思い起こさせるのは，彼の犬の名前が Sancho であることば  
かりではない」との見解を示し，ギルバートのまじめになればなるほど可

笑しさを誘ってしまう部分を、「*Northanger Abbey* スタイルのバーレスク調」と呼んでいる (856)。また、Juliet McMaster は、ヘレンとギルバートとの交流を、彼女がアーサーとの生活で失った微笑みを取り戻す過程として分析している (365-68)。

私が思うに、以上のような彼の性質をヘレンは見抜いたからこそ、彼女はギルバートに日記を渡す決意をしたのではないだろうか。少し長くなるが、ヘレンが彼に日記を渡す直前の場面を引用したい。この場面で、アン・ブロンテは、ヘレンが隠蔽している傷の深さを彼の傷と対比させ、そして同時に、それには気づかぬギルバートの愛すべき単純さによって、ヘレンが癒されていることを暗示している。

“You should have come to me, after all,” said she, “and heard what I had to say in my own justification. It was ungenerous and wrong to withdraw yourself so secretly and suddenly, immediately after such ardent protestations of attachment, without ever assigning a reason for the change. You should have told me all—no matter *how* bitterly—it would have been better than this silence.”

“To what end should I have done so?—You could not have enlightened me farther, on the subject which alone concerned me; nor could you have made me discredit the evidence of my senses. . . . but I did not wish to upbraid you,—though (as you also acknowledged) you had deeply wronged me.—Yes; you have done me an injury you can never repair—or any other either—you have blighted the freshness and promise of youth, and made my life a wilderness! I might live a hundred years, but I could never recover from the effects of this withering blow—and never forget it! Hereafter—You smile Mrs. Graham,” said I, suddenly stopping short, checked in my passionate declamation by unutterable feelings to behold her actually *smiling* at the picture of the ruin she had wrought.

“Did I?” replied she, looking seriously up, “I was not aware of it. If I did, it was not for pleasure at the thoughts of the harm I had done you

—Heaven knows I have had torment enough at the bare possibility of that!—it was for joy to find that you had some depth of soul and feeling after all, and to hope that I had not been utterly mistaken in your worth. But smiles and tears are so alike with me; they are neither of them confined to any particular feelings: I often cry when I am happy, and smile when I am sad.” (125)

ヘレンの言葉は、ギルバートが黙ったまま彼女を避けた態度に怒っていたばかりでなく、傷ついてもいたことを表明している。ゴシップと一人で戦う彼女にとっては、彼は虚言を信じないでいてくれる味方であったはずである。彼がヘレンに示した態度は、彼に寄せた信頼をぐらつかせ、男性に対する苦い失望を彼女に与えたばかりでなく、また自分が男性の見極めを誤ったと感じることで、自分に対する自信も失いかねないものであった。

しかし、彼は我身の痛みに手いっぱい、ヘレンに自分が与えた辛い思いに気づかない。彼は、長々と、彼女のために自分が味わった苦悩を訴えるのであるが、このギルバートの大演説は、なんだかもう大げさで可笑しいのである。ヘレンが彼に対してしたことが、もう取り返しのつかないものであり、失われてしまった自分の青春はもうずたずたで、百年たっても立ち直れないと、彼女を責めるわけだが、そんなにすごいものかしら、すこしオーバーじゃないですか、と思えるのである。

彼が自分のものとして語る傷は、ヘレンの日記に綴られていた、まさに彼女の「青春を枯らせてしまった打撃」にこそふさわしいものであろう。だからこそ、ヘレンは、彼の話聞きながら、「彼女が苦勞して描きあげた廢墟の絵」に目をやるのである。この絵は、ヘレンの結婚を象徴的に表している。みずからの誤った選択によって始まり、努力をすればするほど崩壊していった、結婚生活の舞台である Grassdale Manor を描いたものと考えられる。そして、その家庭を廢墟にすることによって損なわれた我身の

精神の荒野の風景でもあろう。自分の内にある傷に比べれば、彼の受けた打撃など、じつに取るに足らないものであることを、ヘレンが感じないわけではない。彼女の微笑みには、「口にできないほどの感情」を言葉で表明することができる彼と、隠蔽し沈黙しつづけなければならない自分との違いに対する皮肉な思いが込められているのだろう。

彼女はその微笑みという表面の下に哀しみが隠れていることを、謎めいた言葉で説明している。たしかに、彼を苦しめたことがおもしろくて笑ったのではないことは事実であろう。しかし、彼が自分の苦悩を表現した言葉を聞いて喜びを感じたことは、認めている。彼女の微笑みは、自分の哀しみを隠蔽すると同時に、彼の単純さ、お馬鹿な愛らしさについて笑ってしまったものでもあるはずだ。そして、ヘレンが廃墟の絵を見つめていることには気づいても、ギルバートはその下に隠されたヘレンが被った傷の深さが、自分のものとは比べようもないことに思い至らない。彼は、表層的な事実を見つけることはできても、ヘレンの隠蔽された傷痕を、廃墟の絵に読みとることはできない。

しかし、だからこそ、ヘレンは彼に日記を手渡す決意をしたのではないだろうか。まず、自分に対する忠誠心と愛情にはまちがいはなさそうである。その上、彼は、彼女が秘しておきたい深淵まで踏み込むことができないはずである。かくして、ヘレンは、彼に日記を手渡す。「最後から数頁をいそいで破りとってから」(126)。

現実的なギルバートがヘレンの日記を読む興味は、彼女に自分以外に愛情を注ぐ男性がいるかどうか、この一点に尽きる。それは、彼が読み終わってから、「彼女に対する同情と彼に対する激しい怒りを覚えたものの、全体としては、僕の心から耐え難い重荷を取り払い、心は喜びで満たされた」(402)と、ハルフォードに打ち明けていることから明らかである。彼にはもう心配はないのだ。彼の愛するヘレンは、もはや夫を愛していないのだから。Clappは、「彼には、ヘレンの日記の芸術的価値を理解できない」

(118) と結論づけているが、少なくとも、日記を読む彼の関心は、まったく別のところにあるのだから仕方がないとも言えるだろう。

では、アーサーは、芸術家としてのヘレンを理解していただけるか。否、である。彼は、その絵がうまく描かれているかについては、まったく関心がない。彼が嗅ぎ出すのは、その絵の背後に隠されたヘレンの感情である。アーサーは、ヘレンが絵の裏に描いた彼の肖像画を発見するばかりではない<sup>(13)</sup>。つがいの鳩を見上げる若い娘を描いたヘレンの絵について、彼は、「かわいらしい純な娘！ この娘は、この雌鳩と同じように、いつか自分も、愛を情熱的に語る恋人に言い寄られて口説き落とされる時が来ることを考えてるんだね」(157) と解釈する。ヘレンの内に秘められた恋に憧れる気持ちを見抜いてしまうのである。一方、彼は、この絵が、ヘレンが「自分の傑作となるようにずいぶん骨を折って描いている」(156) ものにもかかわらず、画家として評価してほしいその技術的な部分、彼女の腕前については、一顧だにしない。

このような、アーサーの獵犬のように鋭い嗅覚、すなわち、他者の秘められた部分を嗅ぎ当て、それを利用する資質が、まさに、ヘレンを深く傷つけたのである。彼女の精神は、ギルバートに語ったように、喜びを素直に表現出来ない、哀しみをそのまま涙で見せることはできない生活によって、廃墟と化している。このような彼女にとって、ギルバートの単純さは救いなのではないだろうか。素直に喜怒哀楽を示すことができる彼は、自分が失ったものを保持している。彼女がそれを制御すれば、ギルバートは安全な犬として家庭に微笑みをもたらしてくれる存在となるはずである<sup>(14)</sup>。

また、ギルバートには、まったく美の鑑識眼がないわけではない。もう一度、彼がアーサーの肖像画を見つける場面に戻ってみたい。

It was the protrait of a gentleman in the full prime of youthful

manhood—handsome enough, and not badly executed ; but if done by the same hand as the others, it was evidently some years before ; for there was far more careful minuteness of detail, and less of that freshness of colouring and freedom of handling, that delighted and surprised me in them. (45)

ギルバートは、若いアーサーの肖像画がヘレンのもっと若い頃の作であることを、その筆致から推測している。彼の推理は当っており、また、彼の絵画のテクニックを鑑賞することができる視線によって、読者は、ヘレンの技術が成熟したことを知る。彼女は、夫のもとを去る決心をしたときに、「パレットとイーゼル、かつての私の大事な遊び友達」を、「まじめな仕事の仲間」にすることで、自活の道はなんとかなると考えた (356)。この決意が、彼女の技術に磨きをかけ、彼女をプロの画家としたのだろう。しかし、アマチュア時代のヘレンのいっしょうけんめい細部まで写しとろうとした筆致の奥にある激しい愛情を、ギルバートは見抜くことができない。ここでも、彼の理解は表層にとどまり、内に隠されたものに気づくことができない<sup>(15)</sup>。

このようなギルバートの資質は、再会したヘレンからクリスマス・ローズを渡される場面に端的に表れている。冬の戸外で厳しい寒さに耐えてきた薔薇を差し出して、ヘレンはこう言う—「ほら、ギルバート、花としては、まだ十分若々しく美しいでしょう、まだ花びらに雪がのっているけれど。—これを受けとってくださいませんか？」(492)。この小説の読者で、この薔薇が、ヘレンの「心の象徴」(493)であることを理解できない人はいないだろう。しかし、ギルバートは説明されないとわからないのである。彼が躊躇しているうちに、ヘレンは、いらないんなら捨てましょう、と窓の外に放り出してしまふ。ここからが、マーカムくんの面目躍如である。わんわんとあわてて走り出て、「跳びかかるように」(492)薔薇に手にすると、彼



女のもとに馳せ戻り、もう一度渡してください、と懇願するのである。ああ、なんて、可愛いわんちゃん然とした態度でありましょう。このいじらしい忠実さが、彼の「頭の固い大馬鹿」(493) ぶりをカバーし、めでたくヘレンのプロポーズは完了するのである。

ギルバート・マーカムは、ミステリにおける red herring, すなわち、作者によって蒔かれた「目くらまし」にまんまとひっかかるタイプの人間である。しかし、この性格ゆえに、彼は、「真実」を手にするとも言えるのだが。彼の早とちりが red herring を真実と考えて行動し、結局は真実を手にする、というプロットを、アン・ブロンテは二度使っている。一つは、ロレンスをヘレンの隠れた恋人と考えて彼女を避けようとするが、結局、ヘレンによって日記を渡されることになる前半の山場。二つ目は、ロレンスが、ヘレンとウォルター・ハーグレイヴとの結婚に立ち会うために出かけたと思い込んで、それを阻止しようと、名犬ラッシーよろしく遠路はるばる、はやる気持ちで、グラスデイルまで行く小説終幕の大団円に向かう場面である。作者は、彼を二度もひっかけているわけで、ギルバートがもっと慎重な男であったら、彼女を追って出かけることはしなかったはずで、再会はありえなかったことになる。ギルバートは、やはり、愛すべきお馬鹿に設定されなければならなかった。アン・ブロンテは、じっさい以上に、しかつめらしい作家だと考えられているのではないだろうか。ギルバートの場面を読む限り、彼女は、けっこうしたたかなユーモアの持主であり、理想的な男性の造形においては非常なリアリストであったように思われる。

しかし、ここで、強調したいのは、アン・ブロンテが、彼への red herring として蒔いた餌の両方に、ロレンスが使われているということの意味である。ギルバートは、手紙を送るハルフォードに、ロレンスのことを以下のように紹介している――

I liked the man well enough, but he was too cold, and shy, and

self-contained, to obtain my cordial sympathies. (36)

つまり、彼は、ギルバートにとって、近寄り難い存在であり、このような性格造形と、その彼を理解できなかったことが相まって、ギルバートをまちがった方向へ、しかし、二度目は、それが逆に作用して、ヘレンのもとへ彼を導いたことになる。

ロレンスの性格の中の、とくに、“self-contained”は、彼の姉であるヘレンについても言えるのではないだろうか。そして、この重層的な意味をもつ形容詞は、ヘレンの日記を語るのにもっとも適したものに思われる。日記にヘレンが語ったことは、もともと彼女だけのものであったし、ギルバートがそれを自分の語りの「なかに収容しよう (contain)」としても、取り込まれることを拒み、自立した存在性を維持している。Gordonは、「ギルバートがヘレンの過去を完全な過去にしようとしているのに、彼女の目的は、彼女の過去を現在にすることであり、そのゆえに、彼の語りは彼女のもくろみをけっして取り込むことができない」(728)と考察している。ギルバートの語りのなかで、自立した世界を形成するヘレンの日記は、そのまま、彼の手をすり抜ける存在性、彼女の弟と同じように、ギルバートには理解できないもののあることを、おのずと語っているのではないだろうか。もちろん、それは、ヘレンが彼に見せることをよしとしなかった、書かれはしたが、彼女が自分だけのものとした、あの日記の最後の数頁を含めて。彼にそれを与えないことによって、「彼女の物語を再構成しようとするマーカムの試みは永遠に不完全なまま」(Clapp, 121)となる。

ヘレンが裏返しにしてしまっておいた絵を、彼女の許可なしで見たギルバートに対して、ヘレンは、「あなたの好奇心は満足させられることはないでしょう」(45)と言った。この言葉は、ギルバートの語りによるヘレンの物語を読む私たちに対する、アン・ブロンテからの皮肉なメッセージでもあるのではないだろうか。しかし、もちろん、これは、彼女が組み立てた

小説の構造，語りの方が間違っていたというのではない。むしろ，真実を描こうとすることを作家の使命と考えていた彼女にとって、『ワイルドフェル・ホールの住人』の構造と語りの方は，Signorotti や Jacobs らが指摘しているように，彼女が生きた社会の中で，女性と彼女たちのライティングがおかれた状況を，そのまま再現する手段であったろう。そして，そのねらいは，成功しているのだ。アン・ブロンテに限らず，「彼女たちの勝利は問題を孕んでいる。彼女たちは，その社会において，借地人にしかたれないのだ」(Clapp, 122)。彼女の小説において，「女性の欲望は制御されると同時に解放される」(Poole, 871) という矛盾と逆説を抱えたままで。

ただ，アン・ブロンテは，もはや，男性の名前を借りて，男性のペンによっては，女性の真実を語ることはできないと気づいたのだろう。夫としてのギルバートは，ヘレンのような女性にとっては，ある意味では理想の男性である。しかし，彼はヘレンの日記の読者としては，あまりにも脳天気であるし，作家としての彼は，彼女の沈黙のうちに隠蔽した精神の深みを描き出すことはできない。つまり，彼の語りは，ヘレンの日記の語りを読まなければ，完全なものとならない。ヘレンは，彼の語りの注釈として，みずからの日記を手渡したのだと考えることもできるかもしれないのだ。

もしアン・ブロンテに作家としての人生が残されていたら，彼女は，ヘレンが沈黙のままに，読まれることなく存在させた彼女の草稿を，日記の最後の頁を，読者に公開しただろうか。ギルバートの手紙／語りには取り込まれることのない，別の物語を書くことがあっただろうか。いずれにしても，ギルバートではなく，アン・ブロンテの語りは，Marguerite Duras の言う，女性のうちにある，「底知れぬ暴力」，「人が探究しようととつめながら，沈黙に返してしまう本能的行動」(103-04)があることを，私たちに語っている。「この物語の沈黙を復元する。つまり，その深い沈黙をもって文学を復元する」<sup>(16)</sup> (Duras, 103) 作業は，彼女の後の作家のテキストの中を探さなければならない。

## 注：

- (1) テキストは、Herbert Rosengarten, ed., *The Tenant of Wildfell Hall* (Oxford: Clarendon Press, 1992) を使用し、ここからの引用は、文中に括弧に入れて頁数を記す。なお、この版は、初版の三巻本の章分けを採用しているが、論の中で章について言及する場合は、Penguin 版ほかの modern edition の章分けであることを、おことわりしておく。
- (2) 近年の語りの技法と構造を中心テーマとする雑誌論文の著者を、発表年とともに列挙する。Arlene M. Jackson (1982), Jan. B. Gordon (1984), N. M. Jacobs (1986), Carol A. Senf (1991), Elizabeth Signorotti (1995)。
- (3) Virginia Woolf は、作家活動の初期と晩年に書いた女性の日記をめぐる二つの物語で、この二つのケースをそれぞれ扱っている。舟橋の小論を参照されたい。
- (4) アン・ブロンテが家庭教師を務めていた Thorp Green Hall に、彼女の推薦でブランウェルも同じ職を得、その当主の夫人、Lydia Robinson と彼との「恋愛」と実りない結末が、彼を自暴自棄にしたというのが、伝記的な要素と言われているものであるが、この概略についての批評を交えた解説は、Rosengarten (xi-xv) を参照されたい。『ワイルドフェル・ホールの住人』の登場人物に、もしブランウェルを見るときならば、Arthur Huntingdon よりも、Lord Lowborough であろうとする見解については、Rosengarten (xiv), 山口弘恵 (184) 他に指摘されている。また、ハンティンドンと彼の仲間たちの描写は、飲酒や酒浸りについての当時の書物等から得た知識によるものではないかとする見解は、Marianne Thormählen の論文に詳しい。
- (5) この作品が当時の読者に与えた衝撃は、作者の想像よりも激しかった。「多くの批判者にとっては、社会の法に照らしてみると、公にはアンの描く人物たちの行動そのものが不道德であるのは事実としても、それを公表したことを非難している。更に彼らを怒りに駆り立てたのは、ヘレン自身の行為で、放埒な夫ではあっても彼女が選んだ身の処し方が彼らには許せなかったのである」(山口, 139)。
- (6) 「彼女はヴィクトリア社会の『掟』を破って、息子を連れて夫の許を逃げ出したということになるのである。当時の社会では、別居をする場合には、子供は夫の許に置き、妻が子供に会うことは許されなかったからである」(山口, 139)。
- (7) すなわち、初版を請け負った T. C. Newby によるおびただしい誤植。ベストセラーとなっていた *Jane Eyre* の作者 Currur Bell を *Wuthering Heights* と *Agnes Grey* の作者 Ellis と Acton Bell と同一人物のように見せ

かける広告等で示した Newby の不誠実な態度。Charlotte Brontë の本作品に対する否定的な意見によって1850年の Smith, Elder 社からの再版が妨げられたこと。1854年の Thomas Hodgson の Parlour Library シリーズからの一巻本が、アーサーと仲間の会話を削除し、オリジナル・テキストの第1章の前におかれた “To J. Halford, Esq.” の部分を欠落させた形で出版し、これが以降長期間にわたって流布した廉価版に反映されたこと、などである。詳細については、Rosengarten の解説、G. D. Hargreaves の Note on the Text を参照されたい。

- (8) 出版社 Newby の誤りを正すために、アン・ブロンテは、姉のシャーロットと彼を訪れ、自分たちが女性であることを明らかにし、また、第二版の序で, Currer, Ellis & Acton Bell は、三人別々の作家であることを読者にはっきりと明言しなければならなかった (Rosengarten, xxxi & xxxix)。
- (9) このような読みは多くの批評が明らかにしてきたことである。たとえば、Carol A. Senf は、この小説は、「個人の肖像ではなく、時代の肖像であり」、「十九世紀の結婚観がどのようにして女性を沈黙させるのか」を、読者に考えさせる (450) と評している。また、Alisa M. Clapp は、ヘレンの「芸術家としての自己表現は、夫の要求の奴隷となり」、「自分の攻撃されやすい感情の流出を隠すことを学ばなければならなかった」彼女が、日記を書くことを通して、その止められた情緒的な芸術を試みる喜びを見出したことを、指摘している (117)。
- (10) このことは、Juliet McMaster も指摘している。彼女は、場面の鮮やかな進展を会話を通して描いたことが、この小説の優れた特質の一つであると評価し、登場人物の声の調子、話手の表情等によって、会話が補強されているとしている (McMaster, esp. 358-59)。
- (11) ここでは、ヘレンの日記に語られる、ミリセントと Ralph Hattersley の夫婦関係について論じているスペースがないが、作者は、この副次的人物において、女性の過度の沈黙が招く危険性を示そうとしたように思われる。また、ミリセントの夫となるハタズリーは、やさしくて口答えしそうにない女性を結婚相手に選びながら、彼女の手ごたえのなさにいらだつという矛盾を抱えた人物であり、当時の社会が女性に要求した像をそのまま信じ込むアーサーよりも複雑な人物として設定されているのではないかと思われる。
- (12) ふたりの間の本の交換を通しての交際の背後にある意味については、Gordon (725-27) に詳しい。
- (13) ヘレンの絵の二面性については、Gilbert and Gubar, 81, Clapp, esp. 119 を参照されたい。

- (14) Poole は、「男性が望ましい存在になるためには、躍動する精神と抑制の両方を備えなくてはならないという主張が、この小説のテーマであろう」(865)と指摘している。
- (15) この場面は、一度も小説の中で対面することがないヘレンをめぐる二人の男性が、向き合う唯一の場面である。肖像のアーサーの今にも笑い出しそうな口元を、ライバルのギルバートに対する勝者の微笑みと考えると、じつに皮肉な様相を呈する。ヘレンがアーサーに向けた激しい愛情は、たしかに憎しみに変わったにせよ、そのような深い感情を、ヘレンが二度目の夫に向けることはないことを、アーサーは知っているかのようである。
- (16) 田中倫郎氏の訳語をお借りした。

#### 引証資料：

- Brontë, Anne . *The Tenant of Wildfell Hall*. 1848. Ed. Herbert Rosengarten. Oxford : Clarendon Press, 1992.
- Clapp, Alisa M.. “The Tenant of Patriarchal Culture : Anne Brontë’s Problematic Female Artist.” *Michigan Academician* 28. 2. (Mar. 1996) : 113-122.
- Craik, W. A. “The Tenant of Wildfell Hall.” 1968. *Modern Critical Views : The Brontës*. Ed. Harold Bloom. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Pub., 1987. 37-56.
- Duras, Marguerite. *La vie matérielle : Marguerite Duras parle à Jérôme Beaujour*. Paris : P.O.L. : 1987.
- Eagleton, Terry. *Myth of Powers : A Marxist Study of The Brontës*. 1975. Trans. 大橋洋一 『テリー・イーグルトンのブロンテ三姉妹』(東京：晶文社，1990)
- 舟橋美香 「日記をめぐる二つの物語：ヴァージニア・ウルフの「ジョウン・マーティン嬢の日記」と「遺産」」『調布学園女子短期大学紀要』24 (1991) : 133-161.
- Gérin, Winifred. Introduction. *The Tenant of Wildfell Hall*. By Anne Brontë Harmondsworth : Penguin Books, 1979. 7-18.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic : The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven and London : Yale UP, 1979.
- Gordon, Jan. B. “Gossip, Diary, Letter, Text : Anne Brontë’s Narrative *Tenant* and the Problematic of the Gothic Sequel.” *English Language*

- History* 51 (Winter 1984) : 719-745.
- Goreau, Angeline. Introduction. *Agnes Grey*. By Anne Brontë. Harmondsworth : Penguin Books, 1988. 7-47.
- Hargreaves, G. D. Note on the Text. *The Tenant of Wildfell Hall*. By Anne Brontë. Harmondsworth : Penguin Books, 1979. 19-21.
- Jackson, Arlene M. "The Question of Credibility in Anne Brontë's *The Tenant of Wildfell Hall*." *English Studies* 68 (1982) : 198-206.
- Jacobs, N. M. "Gender and Layered Narrative in *Wuthering Heights* and *The Tenant of Wildfell Hall*." *Journal of Narrative Technique* 16 (Fall 1986) : 204-219.
- Knapp, Bettina L. *The Brontës : Branwell, Anne, Emily, Charlotte*. New York : Continuum, 1991.
- McMaster, Juliet. "'Imbecile Laughter' and 'Desperate Earnest' in *The Tenant of Wildfell Hall*." *Modern Language Quarterly* 43 (1982) : 352-368.
- Poole, Russell. "Cultural Reformation and Cultural Reproduction in Anne Brontë's *The Tenant of Wildfell Hall*." *Studies in English Literature, 1500-1900* 33 (Fall 1993) : 859-873.
- Rosengarten, Herbert. Introduction. *The Tenant of Wildfell Hall*. By Anne Brontë. Oxford : Clarendon Press, 1992. xii-xxxii.
- Senf, Carol A. "*The Tenant of Wildfell Hall* : Narrative Silences and Questions of Gender." *College English* 52 (April 1990) : 446-456.
- Signorotti, Elizabeth. "'A Frame Perfect and Glorious' : Narrative Structure in Anne Brontë's *The Tenant of Wildfell Hall*." *The Victorian Newsletter* 87 (Spring 1995) : 20-25.
- 田中倫郎 訳 『愛と死、そして生活』 by Marguerite Duras. 東京 : 河出書房新社, 1987.
- Thormälen, Marianne. "The Villain of *Wildfell Hall* : Aspects and Prospects of Arthur Huntingdon." *The Modern Language Review* 88 (Oct. 1993) : 831-841.
- 山口弘恵 『アン・ブロンテの世界』 東京 : 開文社, 1992.